

第10回 プリンシプル（原則）のない日本

IT生

衆参同日選などとかまびすしい。

政界のご意見番こと元秘書官の入道先生は「ありえねえ」と、なにかといえば最近の選挙だよりな軽佻浮薄な世間を戒める。なぜ同日選なのかというと、「改憲」を目論む安倍政権が、衆院の勢いを参院にもという算段だと巷間いわれている。ところで、この「改憲」論議だが、すでに現憲法創案時から問題提起していた人物がいた。吉田茂首相の側近中の側近といわれ現憲法制定時に日米間の交渉役のひとりだった白洲次郎である。



GHQに「従順ならざる日本人」と一目置かれていたとされる人物であるから、齒に衣着せることは、鼻から念頭にない。「憲法などにはズブの素人の米国の法律家が集ってデッチあげたものだから無理もない」としたうえで、「現憲法は米国の押しつけ」と明言している。

一方で、「いいものはいいと認めるべきだ」と「象徴としての天皇」「戦争放棄」をあげる。しかし、「戦争放棄」なら「なおさら安保は必要だ」と日本国民にクギを刺すことも忘れな。そして、当時の安保反対勢力に「国際協定下において、無防備国家の存在の可能性を少しでも認める連中は、スイス人にきいてみるがいい」と戒める。

こうした首相がいいようなことをいう白洲はしかし、一度も政治家であったことなどない。どころか、東京の郊外の鶴川に戦時中から農家を構え、農作業に励んでいた。そしてこううそぶくのである。

「農民の生活向上ということがしばしば論ぜられるが、都会でソファでふんぞり返って勝手なことをいったところがちっともピンとこない」「尊敬する人物は鶴川の部落にたくさんいる。農林一号をつくったヒトも偉いね。クリエートしたんだもの。ああいうヒトに文化勲章やったらいい」

これとそっくりなことを言ったのが、戦中の昭和18年に起きた鳥取地震の時の県知事だ。震災記録のなかで、壊滅状態となった鳥取市街地の避難生活に触れ、「ひごろ都会の人間は地方（田舎）の人間をバカにするが、こういう災害時非常時には、茫然と座り込むだけである」と記した。

このふたりの言葉から考えるべきは、人間が風雪に耐えるには地に足の着いた生活感が不可欠だということだろう。

入道先生、白洲次郎、時の鳥取県知事…。いつの時代にも「プリンシプルのある人類」はいるものである。及ばずとも、せめて見逃さない努力はしよう、と思う。

(平成28年2月)